

20121119 士業企画_議事録

テーマ 「公認会計士から見た危ない会社の見分け方」

発表者 江黒崇史氏（清和監査法人パートナー、公認会計士）

日時 2012年11月19日 19時00分～20時50分

場所 東京・竹橋 ちよだプラットフォームスクウェア

参加者 10人（会社経営者、会社員、弁護士、弁理士、司法書士、行政書士など）

本日の目標

1. 危ない会社とは？を知る！
2. 決算書の基礎を学ぶ！
3. 危ない事例を学ぶ！

発表

1. 危ない会社とは？

○「財務」、「営業・投資」、経営陣・株主が危険

その中から2点をお話する

「財務」。企業は継続することが大切。資金繰りが回っていないは危険

「営業・投資」。不透明な債権・在庫・投資がある。「のれん」が巨額である

○決算書から「危ない会社」を見分けるステップ

ステップ① 決算書の役割、ポイントを知る

ステップ② 時系列比較する、できれば同業とも比較する。数字の増減と指標を意識する

ステップ③ ビジネスの背景を想像する。この想像と現実を照合する

チェックポイント① 決算書（貸借対照表、損益計算書、CF計算書）はみなつながっている
決算書で会社のビジネスが見える

チェックポイント② 貸借対照表は資金調達とその運用
右側が資金調達（負債と純資産）の内容を示し、左側がビジネスの状況を示す

チェックポイント③ 損益計算書は会社の成績表
営業利益、経常利益、純利益の注目が高い

チェックポイント④ CF計算書はキャッシュの流れがわかる

営業キャッシュフローをチェックする

「キャッシュはウソをつかない」

キャッシュフローは会社のステージによって見方が異なる
しかし、営業キャッシュフローはプラスでないと危険

チェックポイント⑤ 決算書はどの順番でチェックするか？
まずは、安全性をチェック。ついで、収益性、さらに、成長性
安全性は貸借対照表で確認する

○財務が危ない会社とは？

チェックポイント① 財務安全性とは企業の財政状態の安全性
他人資本は返済義務があり、多額であると危険
それを貸借対象で見破る

チェックポイント② 貸借対照表は資金調達とその運用
純資産が大きいほど安全
流動資産が大きいほど安全

チェックポイント③ 流動比率とは財務の安全性を図る指標
一般的には200%以上が理想

チェックポイント④ 自己資本比率は純資産と総資産の対比
一般的には20%以上で安全

チェックポイント⑤ 短期の安全性から確認して長期の安全性へ
手元流動性→当座比率→流動比率→自己資本比率

○財務が危ない会社の事例

S社の安全性は？

貸借対照表

流動比率 H12/03 102% → H12/09 76%
自己資本比率 H12/03 25% → H12/09 10%

短期借入金、急増。利益剰余金はマイナス

損益計算書

売上利益のマイナスが大幅に拡大
売上が伸びていない。また、固定費が重い

リストラ費用を特別損失で計上し続けている
一度にすべきリストラを何度も繰り返している

CF 計算書

営業キャッシュフローがマイナスのまま(会社の営業がキャッシュを生んでいないことがわかる)
関係会社を売却して投資キャッシュフローをプラスにしている
短期借入金を増やして財務活動をプラスにしてしのいでいる(これにより現預金は増えている)

○分析が騙される会社の事例

分析の手法は知っていても騙される

流動性指標の罠。U社の例

売上だけでなく、資産の回転状況や「のれん」の価値を考える
CF 計算書をみれば悪化の兆候がわかった。P/L は好調だが、自己資本比率や営業 CF をみれば危険兆候がわかった
(全体的な比較と想像が大切)

○営業、投資が危ない会社？

売上だけでなく、資産の回転状況や「のれん」の価値を考える

押し込み販売は「滞留売掛金」、「滞留在庫」に兆候が出る
M&A では「のれん」の価値に不正兆候が出る

○滞留債権、滞留在庫の見分け方

売上と債権、在庫を結びつける

売上があっても、売掛金を回収しなければ、お金は入ってこない

売掛金、在庫とも何か月分の売上で回転しているかを把握する

売上債権回転期間、棚卸資産回転期間

資産は現金製造機、回収して現金へ

○この会社債権や在庫は平気？

F 社の場合

売上債権と在庫は前期比較と回転期間をみる。増加率が同レベルでも危険

売上債権回転期間が「23ヵ月」だった

(期間比較をして、B/S と P/L をつなげてみると見えてくる)

○M&A とのれん

企業の成長に M&A は有効

企業は成長性が求められるので、M&A は成長の時間を買えるので有効

他社を買収するのだから買収対価には上乘せ(プレミア)が発生する

チェックポイント

「のれん」は買収プレミアム、価値のない買収では減損対象

買収企業の価値がない＝「のれん」としての価値がない⇒「のれん」の減損処理が必要となる

○社の例

○社事件の特徴

80年代に手がけた財テク投資がバブル崩壊の影響で含み損に
金融商品会計基準が整備
含み損が顕在化するおそれ
損益へのインパクトを緩和させるため、M&A を利用し巨額の手数料やのれんを発生

顛末・・・

決算書は前期比較してみる。異常値がわかる
1年間ののれんが2200億円増加
翌期、のれんを762億円減損している

M&A による飛ばし解消
連結対象外ファンドを利用した M&A

連結対象外を設立。ファンドには当初資金がないため、O社が銀行へ預金等を預託し、当銀行から
ファンドへ貸付ける
ファンドからオリンパスへ入金して「飛ばし」取引成立
価値の低い会社を売却。高額買収。多額の「のれん」発生
翌期に減損

※まとめ

①決算書は

- ・まず役割、構造を学ぶ！
- ・見るときは前期比較、同業者比較など、必ず比較してみる！
- ・回転期間分析も有効！

②財務の安全性

- ・流動比率や自己資本比率をみる癖をつける！
- ・資産、負債の内容を確認する！
- ・指標や分析はあくまでツールであり、きちんとビジネスの実態を見る！

③営業、投資の安全性

- ・一見成長していても、資金が回っていなければダメ！
- ・滞留債権、滞留在庫の兆候がないか、必ず確認！
- ・「のれん」は見積もりのプレミアム部分のため慎重にみる！

以上